

駿府城跡天守台発掘調査現場見学会資料

1 発掘調査の目的

駿府城跡天守台跡地の整備方針決定に向けて、天守台の正確な位置や大きさ、構造、残存状況といったデータを得るため、平成 28 年度から平成 31 年度まで 4 年をかけて天守台全体の発掘調査を行っています。3 年目に当たる平成 30 年度は、大御所家康の天守台東側と新たに発見された豊臣方の天守台を調査しました。

2 発掘調査でわかったこと

(1) 大御所家康の天守台の全容確認

①天守台南東隅と東側の調査

平成 30 年度は天守台東側（東辺）を確認する調査を行いました。その結果、一部の石垣は既に失われていたものの、天守台南東隅と東辺の石垣が見つかりました。これで、平成 29 年度までに検出された天守台西辺、南辺、北辺の石垣と合わせて、天守台の四辺の状況が明らかになりました。

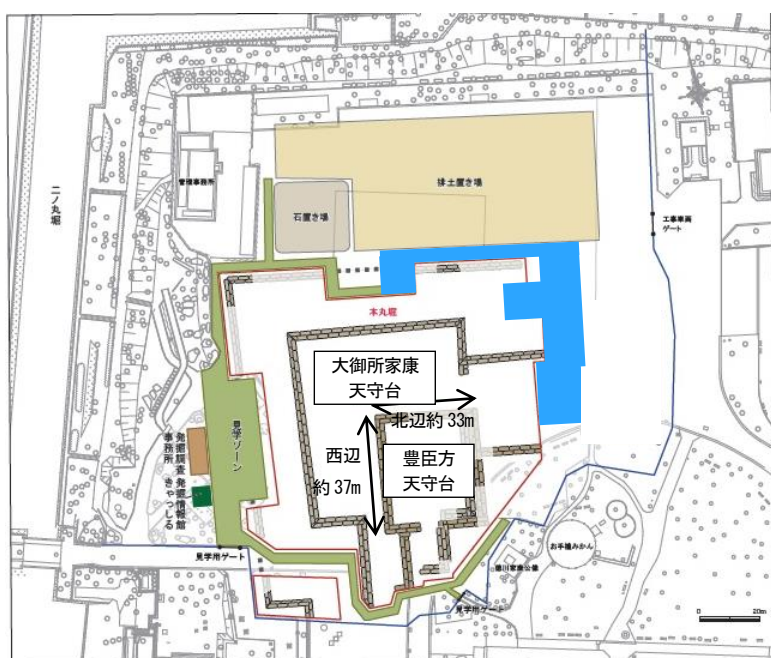


図1 調査区概略図

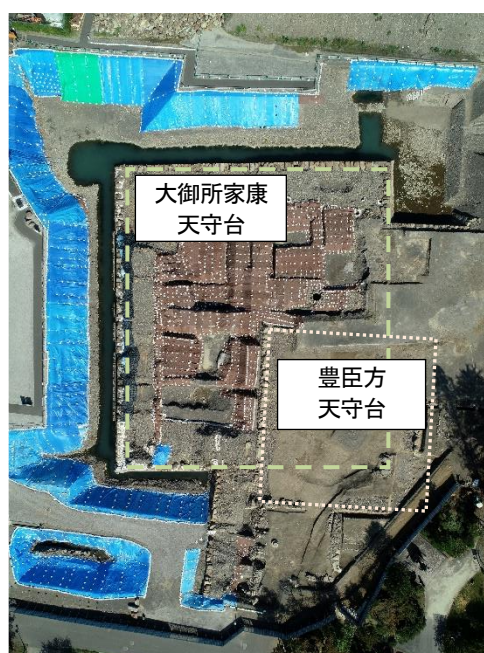


図2 2つの天守台の位置

②天守台石垣の基礎構造の調査【写真1】

大御所家康の天守台の北辺で、石垣の最下部にある石が見つかりました。これらの石は不規則に並べられていました。さらに、この石の下には川原石が敷き詰められていました。

石垣には非常に多くの石が使われ、石垣上にも建物があるため、全体では相当な重量になります。この重さを支え石垣が崩れないようにするためには、下に沈み込もうとする力をバランスよく均等に支えることが必要です。石垣の基礎はこのことに配慮して造られています。一般的に基礎として（※）桐木が置かれますが、この天守台では基礎として、大きな石や川原石が使われています。

（※）桐木…地盤を安定させるために石垣の下に敷かれる木のこと

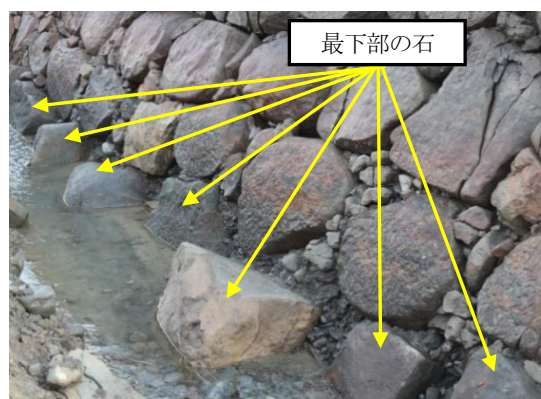


写真1 大御所家康の天守台石垣の基礎

(2) 豊臣方の天守台及び金箔瓦の発見

①豊臣方の天守台及び金箔瓦の発見【写真2】

平成30年8月までに、家康の天守台の内側から家康の天守台とは形状の異なる石垣が発見され、確認できた範囲で南北約37m×東西約33mの天守台（同時代では最大級の大きさ）であることがわかりました。また、発見された石垣の近くから、文様部分が金箔で装飾された瓦（金箔瓦）も見つかりました。石垣の形状や瓦の特徴などから、豊臣秀吉が家臣の中村一氏に命じて築かせた城であると考えられます。今年度末までに、この天守台の四辺の石垣を調査し、その全容がほぼ明らかになりました。



写真2 豊臣方天守台で使用されたと考えられる金箔瓦

金箔瓦330点は、豊臣方の天守台の南西部から見つかりました。この場所は、大御所家康が駿府城の大改修を行った際に、もともと存在した豊臣方の天守を解体し、瓦を大量に破棄して埋めた場所だと考えられます。出土した金箔瓦の文様や瓦の製作技術は、豊臣期の特徴を示しています。

②豊臣方の天守台の特徴【写真3】

天守台の石垣は自然石を積み上げたもので、大きな石と石とのすき間には、丸みのある石（川原石）を詰めています。積み上げた石の勾配（傾き）は、大御所家康の天守台の石垣と比べると緩やかになっています。城が築かれた年代により石垣を積む技術が異なっていたことがわかります。石垣の裏側には、幅約2～4mの範囲で（※）裏込石（栗石）が敷き詰められていました。



写真3 豊臣方の石垣（石垣の勾配の角度は58度前

（※）裏込石（栗石）…石垣を裏側から支えると同時に、雨などで石垣内にたまった水を排水する役割のある石のことで、比較的小さな川原石などが使用される

(3) 大御所家康の天守台に隣接する遺構の確認

①小天守台の石垣の一部を確認（天守台南側）

大御所家康の天守台南側の調査で、天守台に付属する

「小天守台」と呼ばれる部分の石垣を確認しました。

江戸時代、ここに天守台へと進むための階段などがありましたが、すでに破壊されており、確認できませんでした。

②天守下門の石垣の一部を確認（天守台東側）【図3】

大御所家康の天守台東側の、二ノ丸側から天守台がある本丸側に入る出入口があった場所の発掘調査を行いました。

江戸時代、ここには本丸堀にかかる木橋と門（天守下門）がありました。門を入ると石垣に囲まれた空間があり、ま

っすぐ進むことができませんでした。この構造を枡形と呼び、敵の侵入を防ぐ役割がありました。発掘調査の結果、枡形の石垣の一部のほか、門や枡形の基礎だと考えられる川原石が見つかりました。

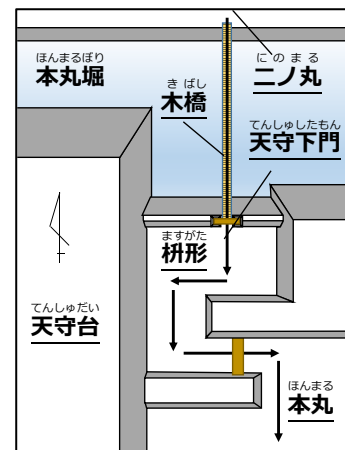


図3 天守下門周辺の配置図
（天守台の絵図を参考に作成）

3 今後の予定

平成31年度は、駿府城築城以前の中世今川期の遺構の有無などを確認するための発掘調査を行います。